「一人見て」という表現

岩下紀之

1

『兼載雑談』(注一)に次の一節がある。

なれにし人も夢の世中
山桜けふの青葉をひとり見て　能阿

新撰菟玖波集の時。此句の前句なかりしとなり。如此おもしろき一句。まれなるべしとて。前句をば作て入られしとなり。

これがそのまま事実であると考えられないのは、この句がすでに『竹林抄』に入っているからで、『新撰菟玖波集』の編集の際には、この句は既に前句付句の完備した形が成立していた。ところが、『竹林抄』古注の『竹聞』(注二)なる書にはこうある。

山桜けふノ
けふノあをはとハ、昨日の落花也。これハ、一句ハかり人〻おほえてあれは、前句ハ此間作りシ也、一句おもしろき句也

『兼載雑談』は兼純による、また『竹聞』は顕天なる人物による聞書であり、それぞれが文亀頃、関東に帰郷した兼載の談を伝えるものである。晩年の兼載は、能阿の句が付句一句のかたちで伝わり、入集に際して前句が添えられたのだと記憶し、そう周囲に語っていたのであろう。文明七年頃入京して宗祇とも関わりがあった兼載が、『竹林抄』が同八年に完成するのを近くで観察していたとしておかしくない。後に講釈する時、その事情を回想したのではないか。一方それを書き留めた者は過去の話として聞いたので、『新撰菟玖波集』編纂の時の出来事と解したとも考えられる。一般的な談話の際では、聞き手がより著名な准勅撰集のこととなり違える可能性もあろう。

宗祇は『老のすさみ』(注二)において

きのふまではさしも盛りなりし花の、行方なく散りはてゝ、山深き木末の青葉斗をうち詠めゐたる時、はなになれきたりし人も、夢の世中ぞ、と観じたる心也。心あくまで有心に、しかも詞づかひ常のことにあらず、かやうの句、ことに吟味すべし。

と述べ、ゆきとどいた鑑賞をしているが、前句を後から補ったなどとは言っていない。兼載の記憶を裏付ける証言にはなっていない。句の解釈自体は両者共通していて、昨日の花盛、落花と、今日の青葉の対照を賞讃している。

ところでこの句に用いられている山桜、青葉、一人、見るなどの語に特異なものはない。また、花と青葉を対比してと

りあわせた句は、すでに『菟玖波集』にある。

二〇七 見し花のおもかけ埋む青葉かな

してみると、能阿の句はこの善阿の名句の先蹤に人事をからめて成功したのであり、「一人見て」というおさめ方が印象的に思われる。

2

「一人見て」という語句はとりたてて特長があるとも思わないのだが、勅撰和歌集にあたると、この語句を使用した歌は二十一代集を通じてただ一首しか見あたらない。『新後拾遺和歌集』の西行の歌である。

四〇五 まことともたれか思はん独みて後にこよひの月をかたらば

それに対し、『菟玖波集』には

西に行今宵の月を独見て　　蓮智法師

四五八 我としたけぬ秋そすくなき

身を捨しより友はまたれす

三三一 かくれ家の深山の雪を独見て　　十仏法師

と二句あり、『新撰菟玖波集』では、問題にしている能阿の句を含む三句がある。

なれにし人も夢の世中

三六四　山さくらけふの青葉をひとり見て　　能阿法師

秋のあはれもたつこゝろから

七五四　たれもみなぬる夜の月をひとり見て　　多々良持世朝臣

さとのとをきに心こそすめ

二六三　松風に野寺の月をひとり見て　　玄宣法師

次に俳諧の用例を『古典俳文学大系』の索引によって探ってみると、一例も発見できなかった。こう見て来ると、二十一代集全体で用例一、連歌の二准勅撰集で計五例、俳諧では対象とした作品群が勅撰集と異質であるが用例なしということになる。とすればこの語句は連歌にのみ愛用されたとも見え、ここから何らかの連歌の特質を探ることができないだろうか。右に引いた和歌と連歌の例では、能阿の句を除いてはいずれも作者の孤独感を強調しているところが共通し、見ている対象も月、雪、花という、いわば最も見る価値のある景物である。さらに考察を進めるために、もう少し用例を求めてみよう。

3

勅撰集以外の和歌の用例を求め、次の結果を得た。平安時代の例は先に引いた西行を含め三首ある。『能因集』

二三六　千鳥なくうみ辺に月をひとり見て都のほかに年の暮れぬる

『風葉和歌集』に、ねざめの広沢の准后の作として

三七〇　しらざりし山べの月をひとりみて世になき身とやおもひいづらむ

これは『物語二百番歌合』にも採られ、評価の高い作であろうが、現行本『夜の寝覚』には見当らず、散逸した部分にあったのであろう。そう考えてよければ、これも平安時代の歌とすることができる。能因、西行とともに、三首とも孤独な人物が月を見ているという共通性がある。

中世の例では注目すべき変化が見られる。鎌倉初期『道助法親王家五十首』に

一〇二　ひとりみて思ひつづくる春のよの月もはかなき身のゆくへかな

と冒頭にこの語句が来る。月を見ているというのは同様であるが、冒頭にこれを持ってくることにより、一首の基調は何よりも作者の孤独感を強調することとなろう。

これ以後の該当句を含む歌を列挙しておくと

二三六　秋の夜の深けたる月をひとりみてねに鳴くばかり物の悲しき　（『瓊玉和歌集』）

三九三　ひとりみて物おもひをればなが月のありあけの月のまたしぐるめる　（『柳葉和歌集』）

七三八　ひとりみてあはれなみだぞこぼれぬる更けゆく空の秋の夜の月　（同右）
二一六　ひとりみて世はつねなりと思ふかなふりぬるやどの苔のあるじを　（『中院集』）
二五二　ひとりみておもひしらなんとはるやと我もまちつる雪のさびしさ　（『拾藻集』）
四〇〇一　ひとりみていく秋過ぎぬ世の人のいむてふものか深き夜の月　（『草根集』）
八三五一　独みていむてふ月にむかへども憂身を捨つるしるしだになし　（同右）
八三七一　独みていむてふことの偽を月にうれふる秋のふるさと　（同右）
五四五　独みてしづかなるよの月にこそ思ひのこさぬ哀そひけれ　（『雪玉集』）

以上の十首を検出したのだが、鎌倉以後は冒頭に「独みて」とおく歌がうち九首を占め、また八首で月を見ている。この語句の用例は決して多くはないが、類型化が進み、とりわけ『瓊玉集』『柳葉集』の作者宗尊親王と、正徹の二人は関心を持って試作したと見てよかろう。

4

再び連歌の検討にもどる。能阿の句は、時間的に二つの場面、すなわち山桜と青葉の時期が詠みこまれ、それに連動して一人見ている作者の背景に、今はここにいない何人かの親しいものたちが思い出されるという組み立てになっていた。これを宗祇は「有心」という評で絶讃していたのであった。『景感道』[注四]に

此連歌は賢盛・宗祇もうらやみて、一期のうち一句所望のよし、たび〳〵申出されしと也。なれにし人も山桜も夢の

世中といふ也。しかも諸人は花散れば帰宅するならひなるを、此作者は跡まで只壱人花に執心なり。

この書も兼載からの聞書と考えると、宗祇・宗伊とともに能阿の句への高い評価は一致している。次にさらに連歌作品におけるこの語句の使用例を検索してみると『菟玖波集』以後、七賢時代に至るまでは次の三例を見出したのみである。

竹あるまとにちかき秋かせ
おき明す臥待月をひとりみて
又ともすれば物ぞかなしき
（『梵灯庵自連歌合』[注五]二番右）

一四七　跡もなき苔路の花をひとり見て　智蘊（『竹林抄』）

一六　ひとりみて月にみしかき夜半もなし　専順（『宗砌発句』[注六]）

この時代この語句が頻用されたとは言えず、宗砌や心敬のように最も多く作品が伝わる作者に用例がない。また右の専順の句も、出典は宗砌の日発句であり、取り扱いに注意が必要である。

ついで、宗祇以降の連歌師の句集にあたってみよう。まず宗祇はこの語句については意欲的に試作しており、何句かを見ることができる。

『専順独吟』[注七]は専順の句作の後に宗祇の句が附載されている。「人のこゝろのかはる世の中」を前句として、百句の付句を試みた作品であるが、宗祇は同じ前句に対し、自分も百句付句を詠んだのである。専順の作を手本として、腕をみがこうとした習作と言えよう。

ねられねばいむてふ月をひとりみて

月を見ることを忌むという題材は先に見た正徹の先例があるものの、冒頭の「ねられねば」とことわったあたり、やや稚拙にみえる。

『心敬専順両師点宗祇付句』(注八)も、文字通り両師に加点を求めた習作であるが、ここにも二句この語句を詠じている。

我なつかしき名ぞ都鳥

二二　難波かたほり江の月を独見て

わかれのあとも春そさひしき

二三〇　夕まくれ霞の空をひとり見て

二二は「都鳥」に対して「堀江」を寄合に取って『伊勢物語』を避けたと見えるが、はたして成功と言えるかどうか。二三〇は見る対象を空にする工夫を試みたのであろう。心敬は二三〇に点を与えたのみで、宗祇自身も自分の句集『老葉』に採らなかった。習作期の努力にとどまったようである。

こうした工夫を重ねて後年自らの句集に入れた句を見てみよう。『愚句老葉』(注九)に二句ある。

むかしのことを心にそとふ

六七　うへし世を花はしるやと独ミて

山下水の音はすさまし

三五七滝とのにはやくの跡をひとりミて

二句とも時間を溯って「うへし世」「滝との」を詠み込んでいる。ただこの過去は句を詠じている時からは遠く、能阿の句の切迫した緊張感は持っていない。ゆったりとした時の流れが典雅な歌語によって歌われている。

兼載も自らの句集にこの語句を用いた句をおさめている。

かへりし雲に身もならははや

鳥も居ぬ青葉の桜独見て

わきてこよひはつらき仮ふし

秋の月都ならはと独見て

二句ともに『園塵』第四[注一〇]に見え、恐らく兼載晩年、東国帰還後の作かと思われる。前者に「青葉の桜」を詠み、これは能阿の句を意識していると想像される。後者には都の月を恋うる旅人に心敬が連想される。『新撰菟玖波集』に「月に恋ひ月に忘るゝ都かな」の名句があり、心敬と兼載の師弟関係や、心敬の東国での流浪と死は当時周知のことがらであったろう。とすれば二句ながら心を込めた作と見える。もとより連歌の付句に個人的な感慨をあらわにすることはないが、当時の連歌作者たちにとって兼載の心中を思いやることができたはずである。

もう一人、宗長もこの語句を用いている。書陵部本[注一一]『壁草』には次の四句が見える。

秋のよふくる浅茅生の宿

六五二 露ことにかけする月をひとり見て
　　秋のおもひそなくはかりなる
六五四 こと、へはこたへぬ月をひとりミて
　　恋そこゝろのやミハふかかる
一四五〇さやかなる折しも月をひとりミて
　　まくらさためハ夢やとひ来む
一四五一おもひたえうかれし月を独見て

能阿・宗祇らの句を熟知していたであろう宗長は、自らは見る対象として月のみを採り、その諸相を詠み尽そうとするように見える。後の『那智籠』にも一句あるが、そこでも月を見るという形であり、宗長は月以外は「一人見」ることがなかったようである。

以上和歌と連歌における用例をあらあら概観したことになる。勅撰和歌集では和歌の用例が一首のみと、極めて稀なように見えたが、検索範囲を拡大してみると、十首以上の用例を得たのであった。この語句を三回用いた歌人が宗尊親王と正徹であったこと。連歌では『菟玖波集』以後それなりに詠まれていたが、能阿の句が高く評価された結果、宗祇・兼載・宗長に何句もあらわれた。

中世和歌にある程度の数この語句が詠まれているのに、勅撰集入集歌が一首にとどまったのは何故だろうか。それは「一人見て」を詠む位置が関係してくるようである。鎌倉以後この語句は冒頭に置かれるようになった。そのわけは『無名抄』(注一二)の伝える藤原基俊の逸話で解かれよう。すなわち、「腰句て文字事」の条に、

いかにも歌はこしの句のすゑに、て文字すへつるに、はかゞしき事なし

と言って、源俊頼の歌を難じている時、その座にいた琳賢が、「さくらちる木の下風はさむからで」と、はてのて文字をながながと朗誦し、基俊が恥をかいた話がある。平安時代には「夕されば門田の稲葉音伝て」「夕されば野べの秋風身にしみて」、何より基俊自身の「ちぎりおきしさせもが露を命にて」と、て留めの名歌が何首もある。しかし中世に腰句の「一人見て」が影をひそめているのを見ると、基俊の議論は後世の感覚を先取りしているように思われる。句切れではないが、上句下句が半端に連なるというのが和歌には不適当になったのだろう。勅興する連歌では、長句のて留めは最も安定した形で、これも和歌の側がこの形を嫌う一因でもあったか。いずれにしても、腰句に「一人見て」を置けば、何をどのように見るのかを工夫するところ、作者の努力のしがいがあるのだが、これを冒頭に置いては孤独の強調以外の効果は期待できず、勅撰入集の水準に達するのは困難だったのであろう。

5

ところで、「を見て」という言い方は、大和詞として何ら無理のない自然な表現である。「月を見て」「花を見て」などは和歌・連俳を通じて極めてありふれた語句である。「一人」と「見る」が連なるのも、これまた何ら不自然でなく、「一人見む」「一人見ば」など、しばしば現れる。ところが「一人見て」の形となるとやや事情が異なる。連衆の居並ぶ場にあって、こう詠むのは普通のことであろうか。先に見た例はいずれも句集におさめられた句で、会席においてはどうであったろうか。百韻・千句の整理が進んできたのを利用して宗長の時代までの作品から次の六例を見出した。

一　文明十四年二月廿三日　聖廟法楽千句[注一三]

作者　親王御方。

二　雲となりしなこりハ袖の時雨哉　を発句とする宗祇独吟百韻[注一四]。

三　文明十四年二月五日　宗伊宗祇両吟百韻[注一五]

作者　宗祇

四　永原千句第八[注一六]

作者　兼載。

五　月村斎千句第二[注一七]

作者　宗碩。

六　永正十年二月十六日　牡丹花宗碩両吟百韻[注一八]

作者　宗碩。

以上の例を見ると日常的に興行されていた普通の百韻が見えないことに気付く。一の千句は後土御門天皇と勝仁親王（後柏原天皇）、伏見宮に中院通秀以下の近臣達が連衆で、問題の句の作者は親王御方である。大原千句と月村斎千句は当代の有数の連歌師達が出座した中で兼載と宗碩が詠んでいる。両吟百韻は名手二人が伎倆を競い合う場であり、世間の関心も高く、興行後ただちに広く書写され世に広まるのである。この二つの両吟には、さらに古注が付されて流布している。宗祇独吟も、第一人者の作として、これまた注目されたに違いない。どうやら日常的な百韻の一座で普通の連衆が「一人見て」と詠むことはなかったらしい。末座・初心のともがらは斟酌すべきであること「花」を出す以上の厳格さであったようだ。

元来「見る」という行為はまことに重大な意味を帯びており、「田児の浦ゆ打出て見れば」「たゆることなくまたかへり見む」などという古歌が思い浮ぶが、さらに溯って「とりよろふ天の香具山上り立ち国見をすれば」などになると、王者の統治行為になってくる。室町に下っても、会衆の中で「一人見る」のは、それなりの人でないと許されないことであった。

ここで一座でこの語句がどのように捌かれているかを見ようと思うが、和歌と連歌、双方の用語・語法が共通していたことをまず確認しておこう。和歌は本来的に抒情詩であり、一人称で自らの感慨を歌うので、「一人見て」とは「私が一人で見ている」ことになる。この語法がそのまま連歌の一座に用いられると、どのように運用されるのであろうか。

文明十四年二月廿三日の千句第一百韻の問題の箇所はこうである。（二裏八句目から）

かすみてめくる日こそ長けれ　実隆
とはれねは軒端の花を独見て　親王御方
いかゝすくさむ春のつれ〳〵　按察使

句に「見て」と詠みこまれているのは、その行為をしているものもまた句の世界の中にいるということになる。すなわち「一人見て」いる作者そのものも付句作者によって鑑賞される。付句作者はこの前句作者の立場をそのまま自分のものにして付けてもよく、また他者として処理してもよい。選択権は付句作者にある。ただいずれにしても作者たちはこの作られた句の世界の中にいることに変りない。さてこの三句の運びで親王御方は前句の長き春日を一人花を見て孤独に過ごしているのだが、按察使はその立場をそのまま自分にとりこみ、この春のつれづれをいかがすごそうかと付けた。一人称のなめらかな受けわたしがなされている。

宗祇独吟では次の通り。（二裏十二句目から）

ならはしによる山の閑けさ
更行を月はさかりと独みて
秋のまくらよ只にあかさし

ここでは一人月を見ている人物がかたわらの枕に呼びかけているようだ。場面を素直に受けついでいるように見える。

宗伊宗祇の両吟にはこうある。（名裏二句目から）

明日をまたんもしらぬ悲しさ　伊
いたつらにたのめし月を独みて　祇
秋風あらく閨そ明行　伊

宗祇は前句の無常を受け、男を待つ女に扮し一人月を見て感慨にひたっていると詠み、宗伊は、男を待つ女の閨の夜明の情景を添えている。ここでも一人称の前句をそのままとりこむことは前の例と同じである。

永原千句第八を見ると、（三表四句目から）

思ひやるにも雨のつれ〴〵　氏安
さやかなる雲ゐの月を独みて　兼載
荻のあらしも更る夜の声　印孝

兼載は雨の前句にさやかなる雲ゐの月と応じまことに奇抜な付け方をした。雨と月とのどちらかが実景、もう一方が心象風景とでも説明したのであろうか。印孝は、無難に秋の景色で応じている。ここでも作者には荻のあらしが聞えている。

次に月村斎千句第二を見よう。（二裏八句目から）

身は遠しまに都恋しも　　真宗
浦波のよる〳〵月をひとりみて　宗碩
関守須磨の秋やわふらん　　宗長

宗碩は源氏の須磨のくだりを踏まえ、自ら源氏になりすまして一人月を見ているのだが、宗長はこれを須磨の関守が月を一人で見ているととりなし、さぞかし秋のわびしさを感じていようと転換した。源氏や歌枕としての須磨を連衆は熟知し、その共通の基盤の上で風雅に遊んでいるのである。

最後に牡丹花宗碩の両吟である。（一裏十二句目から）

わふる霜よの秋のさむしろ　　花
長月の有明まてをひとりみて　　碩
誰まつきぬた千度うつらん　　同

長月の有明の月を見るという素性法師を踏まえた句に、秋の思婦のきぬたを配する。ここでも、作品の世界に入りこんでいる作者にはその音が聞えている。

このように見てくると、連歌作者達は創造した世界に参入し、そこで物を見、あるいは聞いて感じている。付句作者は前句作者と同じように春の愁いを感じ、無常を感じ、源氏を感じている等々であるが、これが可能であるのは詠まれるこ

とどもがすべて類型的で先例に従っているからである。そのため付句作者は前句の一人称の感慨をただちに自らのものとして付けることができるし、あるいは対話したり、別の境地に転換することもできるのである。

6

以上「一人見て」という表現を手がかりとして、連歌賦詠の特長を探ったのであるが、作者は作中世界に参入し、そこで一人称的に活動するということを、連歌一般に確認することができるだろうか。こういう試みはもっとも典型的な作品に対して行うのがよかろうと考えるので、『水無瀬三吟』[注一九]にあたってみよう。

一　雪なから山本かすむ夕かな　　宗祇

発句が当座の感慨を詠むのは自明であり、宗祇は水無瀬離宮の遺跡地にあって、後鳥羽院御製を念頭においていることになる。それ以後の各句を見てみよう。

三　川風に一むら柳春見えて　　宗長

四　舟さす音もしるきあけかた　　祇

連衆は創造された世界の中にいるからこそ、一むら柳が見え、舟さす音が聞えるのである。なおこの個所古注は「惣而、見えてと云は、一句にも付るにも大事也」という。

八　かきねをとへはあらはなるみち　　柏

かきねをとふのは作者自身であり、一人称と言える。

一〇　なれぬすまゐそさひしさもうき　　祇
一一　今更にひとり有身をおもふなよ　　柏
一二　うつろはんとはかねてしらすや　　長

一〇は自分自身の感慨で一一、一二は「おもふな」との下知、「しらすや」との問いかけで、作品世界の内部にいるからこそ、こういうやりとりが可能になる。

一八　わか草枕月ややつさん　　長
一九　いたつらに明す夜おほく秋更て　　祇
二〇　夢にうらむる荻の上風　　柏
二一　みしはみな古郷人のあともなし　　長

「わか草枕」と明示し、次の句の「明す」「うらむる」もいずれも一人称ととれる。古郷人は作者達からは見られうるものとして詠まれている。

以下同様のことをくりかえすのも詮もないので、最後の二句を挙げよう。

九九　いやしきも身をおさむるは有つへし　　祇
〇〇　人にをしなへ道そたゝしき　　長

「いやしき」が宗祇の謙辞であること、全員がこの政道ただしき世の内部にあることも明らかであろう。

もとよりこのような概観によって連歌一般を見尽くすわけではなく、例外も多いことであろうが、当初の仮説はそれなりに成立したように思う。また登場させられる人物はこの世界に参入する作者によって見られたり問いかけられる可能性を持つためきわめて類型的なものばかりである。古郷人（二一）の他にもたらちね（四一）舟人（五二）よすて人（五九）山かつ（七五）行人（七八）など。その他、もっとも抽象的に「人」がしばしばあらわれるが、具体的な個性を持つ人物は決してあらわれない。

これを芭蕉の歌仙と比較すれば、連俳の二つの性質の相異が明確になることであろう。『猿蓑』所収の「市中は」の歌仙、

能登の七尾の冬は住うき　　兆
魚の骨しはぶる迄の老を見て　　蕉

能登の七尾は歌枕でないから、七尾の住人はいまだかつて和歌・連歌の場にあらわれたことがない。この老人は文学史上初めて登場してきた人物であり、彼には先例はない。類型的な嘆老の題であれば連歌師たちは彼に問いかけもできようが、この場に今創造され出現した人物は己れの生を持ち、安易な問答を許さないであろう。

茴香の実を吹落す夕嵐　　来
僧やゝさむく寺にかへるか　　兆
さる引の猿と世を経る秋の月　　蕉

ここでも僧とさる引は情景にふさわしく創造されており、従来からの類型は存在しない。さる引は自らの意志で猿と世を経る人生を選択して生きている。彼に別の生き方を下知するのは無意味であり、作者たちはこの世界の外におり、作中の人物とは別の次元の存在である。歌仙の内の世界に入って述懐することも、風や時鳥に下知することもない。

7

最後に連歌史のもう一面を確認しておきたい。『水無瀬三吟』に見る宗祇の作風、すなわち賦詠された世界に作者は参入し、一人称的な関わりを持つという作風であるが、これとは別の作風もあったわけである。『菟玖波集』

ひたりも右も袖ぬらしけり

二四〇憂恋の心をよめる哥合　　順覚法師

この場合、作者は歌合に自ら出席したと想定しているのではあるまい。前句の「ひたりも右も」をどのように解決するかに智恵をしぼり歌合を出すことによって難題に応ずることに成功したのである。作者は句の外に立ち、難題に際し腕前を披露している。

女神おかみはありやなしやと

二四一いさなきていさなみたにも事とはむ　　良阿法師

ここでも「女神おかみ」に対して「いさなきいさなみ」で秀句仕立てで応じ、達者な技巧を誇示するのが目的である。このような作風は連歌本来のものであり、宗祇もこうした技巧的な句を『竹林抄』に採っている。

裏か表か衣ともなし

八　東雲の朝の山の薄霞　　宗砌

住吉はたゝ此浦の名のみにて

二七五　長井の浜の短世の月　　専順

専順の句は『新撰菟玖波集』にも入れているので、宗祇がこういう種類の技巧を否定していたとは考えられない。それはそれとして、自身は『水無瀬三吟』のような作風へと純化していったのであろう。

芭蕉は自分の先達に宗祇の名を挙げているが、作風を検討してみるとかなりの距離を感ずる。詠んだ句の世界は独立しており、句の作者はそこに参入したりはしない。宗祇の作風はいわば蒸留されたようなもので、連歌の元来のすがたはさまざまの可能性を含んだ混沌としたものであったろう。俳諧の連歌はこの状態から出発している。また蕉門で創造される人物像、「七尾の老人」「さる引」などの存在感からは、『犬つくば集』冒頭の佐保姫の句を思い起す。彼女も自らの意志で行動し、他者からの下知を受けそうにないからである。

本稿に使用した諸書をまず注記しておく。

菟玖波集　金子金治郎氏『菟玖波集の研究』所収本。

竹林抄　島津忠夫氏他『新日本古典文学大系49』

新撰菟玖波集　横山重・金子金治郎氏『貴重古典叢刊４』

猿蓑　中村俊定氏　岩波文庫『芭蕉七部集』

各句にある整理番号はすべて編者に従う。

連歌の検索については勢田勝郭氏の『連歌データベース』におうところが多いことを明記する。

注一　群書類従第十六輯五三三ページ。

注二　貴重古典籍叢刊2金子金治郎氏『竹林抄古注』一五七ページ。

注三　木藤才蔵氏『連歌論集二』一五〇ページ。

注四　木藤才蔵氏『連歌論集四』一三七ページ。

注五　古典保存会叢書による。

注六　大東急記念文庫善本叢刊中古中世編9『連歌Ⅱ』六三八ページ。

注七　『室町ごころ』所収石川常彦氏『専順独吟』二〇三ページ。

注八　斎藤義光氏『「心敬専順両師点宗祇付句」翻刻と解説』（「大妻女子大学文学部紀要18号」）

注九　金子金治郎氏『連歌古注釈集』による。

注一〇　『伊地知鐵男著作集Ⅱ』五〇四・五一七ページ。

注一一　注九に同じ。

注一二　簗瀬一雄氏『校註鴨長明全集』三七ページ。

注一三　国会図書館蔵連歌合集十一。

注一四　江藤保定氏『宗祇の研究』三九四ページ。

注一五　『連歌百韻集』三〇三ページ。

注一六　古典文庫『千句連歌集』七　一九一ページ。

注一七　静嘉堂文庫蔵連歌集によった。

注一八　桂宮本叢書『連歌』一　二五四ページ。

注一九　金子金治郎氏『宗祇連歌古注』による。